



# ザ・ターニングポイント

## 会社発展の契機となった転換点を紐解く

長きにわたる企業の歴史のなかにはいくつもの転換点があります。異分野への事業展開、新しい取引先の獲得、技術開発によるブレイクスルー、あるいは苦境から脱した契機など、現在の発展につながった各社の「ターニングポイント」を紹介しします。(この連載では創業から半世紀以上の会員企業にフォーカスします)

### 第11回

## SANEI 株式会社

### 水道の将来性に着目し、三人で創業

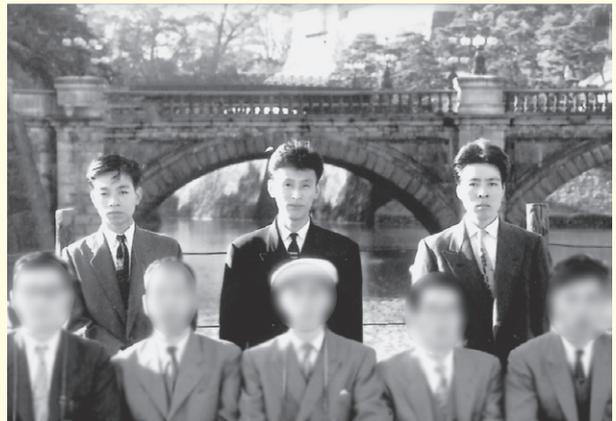
1954(昭和29)年9月、西岡明氏・吉川弘二氏・橋本健一氏の20代前半の若き三名が水道用品の組立・卸販売を行う、三栄水栓製作所を設立しました。「三栄」とは、三名が共に栄えることを願っての命名でした。

当時の日本は、第二次世界大戦敗戦による混乱と社会不安が尾を引くなか、国をあげて戦後復興を推し進める転換期にありました。そうしたなか、1950年の朝鮮動乱を契機とした特需で、日本経済は活力を取り戻していくことになります。この特需は「金へん景気」とも「糸へん景気」とも呼ばれ、機械・金属製品や繊維産業が景気を牽引しました。大阪においてもこれらの産業が戦後のどん底から経済を救うことになりました。

大阪市西区の立売堀<sup>いたちほり</sup>界隈は戦前から金属製品、機械工具を取り扱う問屋が建ち並ぶ地域で、金へん景気の波に乗り、商品は値上がりを見せ、活況の姿が蘇りつつありました。

西岡氏は、この立売堀に構えていた利器・工匠具問屋に勤務しており、刃物の街である南大阪の堺から薪を割るための斧などを仕入れ、立売堀にある店までの長い距離を自転車で運んでいました。将来に希望を託し独立を考えていた西岡氏は、勤務している問屋とは競合することのないよう、しかし自らの経験を活かせる金属製品に関わる商いを探っていました。そんな折、店の近くにポンプや蛇口を取り扱う商店があり、前を通り、商品を観察するうちに「水道商品をやろう」と思い立ちました。

その頃、大阪市の人口は飛躍的に増加しており、生活に欠かせない水道に関わる製品の需要は今後さらに伸びていくだろうと確信したのです。西岡氏は、同僚の吉川氏と橋本氏に独立の旨を告げ、同じく「いずれは」という思いを抱いていた彼らと三人で「三栄水栓製作所」を立ち上げました。



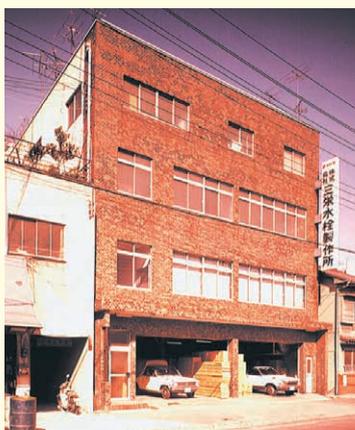
若き3名での創業

三人は立売堀を離れ、大阪市の東端に近い東成区を新会社の場所に決めました。ここは中小の機械工場が多く、江戸時代からものづくりの労働力と技術を培っていた工場の街・東大阪市にも近く、三人はそれらの町工場から水道用品を仕入れ、金物問屋に卸しました。散水のためのノズル、ホースのつなぎなどが当初の主な取扱商品でした。蛇口などの casting 品は、取り扱いたくても既成のルートががちりとしてきており、新興の会社は簡単に入り込めませんでした。別々に仕入れたノズルの先とパッキン・ホース・接手をセットするというような単純な組立ではありましたが、それが単なる卸販売ではない「製作所」の始まりとなりました。

## 株式会社に改組 本格的に給水栓の製造販売を開始

1960年12月に株式会社に改組し、取締役社長に西岡明氏が就任しました。創業以来、簡単な組立作業を行ってはいったものの工場はなく、仕入れてきたものを組み立て、注文がきたら箱詰めして発送するというスタイルは変わっていませんでした。

こうしたなか付き合いのあった協力会社が廃業することになり、設備を引き取ってくれないかという申し出がありました。この話を受け、1966年に本社に隣接して工場を建設しました。初代工場長は、給水栓の製造工場を経営していた経験があり、ビルの水タンクや水洗トイレのタンクに取り付けるボールタップや給水栓等の製造に長けていたことから、これらの製品を新しい工場で作ることにしました。工場を得たことでボールタップや給水栓以外の水道関連製品においても自社での本格的生産を開始し、メーカーとしての認知を得ていくことになりました。機械工場建設の翌々年、1968年に本社ビルを建設しました。

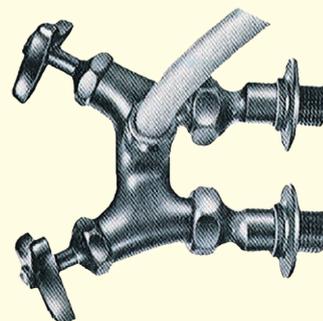


建設当時の本社ビル

## 「お湯の時代」の到来 いち早い家庭用シャワーへの取り組み

同社は昭和30年代から家庭用シャワーの組立販売に積極的に取り組んでいきました。1965年頃は、お湯の出ない水だけのシャワーでした。家庭において行水ではなくシャワーを浴びるということは、当時の日本人にとって、暮らしのランクアップを感じさせるスタイルでした。そんなお湯の時代の黎明期である1967年、シャワー付湯水混合水栓を他メー

カーに先駆けて日本で初めて製作しました。壁からではなく、給水栓から直接シャワーホースが出ている商品は、日本ではまだ作られていませんでした。アフターメンテナンスにおいても、壁を壊すことなく簡便に修理のできる画期的な商品でした。



日本初のシャワー付湯水混合水栓

シャワー付湯水混合水栓は、ガス販売店が家庭にプロパンを設置する際に一緒に取り付けられることが多く、この時期から金物問屋に加え、水道管材問屋との取引が活発になっていきました。それまで、工場で給水栓の生産を始めたものの、新参である同社は、水道のプロである管材問屋に対しインパクトを与えることができませんでした。そのため、配管部材や接手、目皿などの排水関連部材が主な取扱商品でした。しかし、このシャワー付湯水混合水栓の製造販売を開始したことにより、同社はメーカーとして、水道管材ルートに確かな道筋を築くことができました。



改良されたハンドシャワー

戦後、上水道の整備が急速に進み、井戸を利用していた生活は、蛇口をひねれば水が出る便利な生活へと様変わりし、西岡氏が見越したとおり水道用品の需要は大きく進展しました。水栓は水という自然の恵みを暮らしの中に取り入れる「接点」を担い、生活の要として機能しています。三栄水栓製作所は、水栓の安定供給によって人々の豊かな生活になくしてはならないメーカーに成長したのです。

## Turning Point

### 「点」から「線」への展開 ライフラインを「みずみち」として

順調に売上を伸ばすなかで増産の必要性が増してきました。しかし大阪では粉塵規制があり、水栓製造に必要な鋳造工程の拡張ができない状況でした。そこで1980年、岐阜県各務原市に、別会社として新工場を建設。鋳造品の増産を図り、鋳造工程はすべて岐阜に移管・集約することにしました。

岐阜という土地は、刃物製造に加えて、油圧シリンダや給排水用バルブ・コックの製造についても現在、出荷額で全国一位のシェアを持っています。岐阜県には、すでに水栓製造の基盤があったわけです。

その後、1982年に新工場は本社へ合併。1980年代から1990年代にかけて岐阜に各種工場を建設し、一貫生産体制を確立したのです。



1980年、鋳造工場として岐阜三栄水栓製作所を新設。後に機械工場も増設し主力拠点となった。

また、多様化する水栓業界動向に対応するために大阪と東京に配送センターを建設。その後、岐阜工場の隣に中部物流センターを建設したことで在庫管理と生産計画の精度があがり、運搬コストも大幅に削減されました。中部物流センターは2001年に関東物流センターが開設されるまで、単独で物流機能の中心拠点としての役割を担いました。

工場だけでなく営業基盤も拡充。それまで別法人であった東京三栄水栓を1985年に合併したことで経営体質をより一層強化しただけでなく、初の地方営業所である福岡営業所開設を皮切りに、全国各地に営業所を開設していきました。

商品点数も飛躍的に増え、同社が手掛ける建物内の給排水、多くのパーツは、表から見えなくても適材適所で使われ地球規模の「みずみち」の一部とな

り暮らしを支えました。

こうして、点から線へ、安全で快適な生活を支える水まわり用品の総合メーカーへと進化しました。

### 企業活動における質の高さを追求

1985年以降のバブル到来と崩壊は人々の生活にも大きく影響しました。デザインだけではなく付加価値を追求した商品など、水栓に求められる役割も変わり始めます。同社も個々の価値観に合うよう、更に質の高さを追求するように変容していきます。

価値向上に向け、全ての工場でのISO14001取得。このことを契機に「環境」は製品に付加価値を与える要素だという認識が同社内ですます高まりました。技術面ではリサイクル材の活用や、機能面では節水に役立つ自動水栓の開発を進めました。

また、環境とともにテーマとなったのが「ユニバーサルデザイン」。水栓は従来、ハードウェアとしての役割に重点が置かれていましたが、ユニットのひとつとしてソフトウェアの役割が求められました。それを多様なユーザーのニーズに対応する機会と捉え、開発を一層重視しました。

そして水栓への新たな付加価値の創造として、水栓も住空間における一つのインテリアとして捉え、さまざまな空間に合わせたデザインを取りそろえることが必要だと考えました。

インハウスデザインだけでなく、建築家やプロダクトデザイナーとのコラボレーションに取り組み、製品開発に取り組んできました。



ニーズに応じて質の高さを追求

## Turning Point

### 「線」から「面」への展開 新たな水まわり空間を提案

現在、人々のライフスタイルの変化とともに日本の住宅は転換期を迎えています。その中で同社は人々の生活へ新しい価値観を提案するブランドとして第一走者でありたいと考えています。

住まいが日々のオフィスや趣味のアトリエに変わるなか、水まわりは家族の集まる場所であったり、主役になったりするようになりました。しかし、従来のシーンだけでなく、さまざまな水まわりがあっても良いのではないかと水まわりに新たなカルチャーを持ち込む試みを進めています。

こうした進化の過程で、2018年には新たな社名、SANEI株式会社に変更。必ずしも「水栓」にとどまらないブランドアイデンティティーを定義するとともに、海外で認知されつつある「SANEI」ブランドとの統一を図りました。

SDGsにも水でアプローチしており、吐水や止水を声で操作できる水栓や、車いすや子供の方に向けた水栓操作システムなども提供。天然素材の竹を使った水栓や、雨水活用システムなど、水と人をつなぐ企業として「地球のこれから」について考えて行動しています。

さらに、「線」から「面」のコンセプトを表現するために、水まわり空間をライフスタイルに合わせてデザインするブランド「WAILEA」やラグジュアリーなバスタブブランド「FLUSSO」も展開されています。



上：WAILEA（大阪）ショールーム  
下：FLUSSO（東京）ショールーム

## 「大阪・関西万博」の会場に水栓を提供

2025年4月から開催される大阪・関西万博の会場整備にブロンズパートナーとして協賛。「迎賓館」「大催事場」「小催事場」をはじめとした会場内の手洗い施設などに水栓を提供します。

とくに注目すべきは「自己発電する水栓」。水栓のなかに超小型高効率水力発電機を組み込み、水が流れるとタービンが回転し電気エネルギーが発生するというもの。ユニット内に蓄電され、今後の作動のためのエネルギーとなります。まさに未来社会を想起させ、万博にふさわしい商品と言えます。

皆様も、ぜひ万博会場でSANEIの魅力的な商品を体感してください。



本社外観

# SANEI

#### <会社概要>

本社所在地 大阪市東成区玉津 1-12-29  
事業内容 給水栓類、水道器具製造業  
創業 1954(昭和 29)年 9月  
資本金 4億3,200万円  
従業員数 649名(2024年3月現在)

同社ホームページにリンクします▶

